



統計から社会の実情を読み取る

第145回 変容する女性の結婚観：結婚相手に何を求めるか

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る 日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか：統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



「結婚できない」から「結婚しない」へのシフト

2020年の国勢調査で生涯未婚率（50歳段階の未婚率）が大きく上昇し、日本の皆婚社会が崩壊に向かっていることが明らかとなった。この点については本連載の昨年の4月号「皆婚慣習が消えていく兆候」でふれたが、その後、2021年に行われた出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所）の結果が公表され、男女関係の内容や男女の結婚観が大きく変容していることがさらに具体的に明らかとなった。そこで今回は、男女の結婚観をめぐる大きな状況変化について特に目立っているデータを紹介することとする。

出生動向基本調査では、結婚前の18～34歳独身者を対象にした実態調査をほぼ5年おきに行っている。その結果から、まず、結婚するつもりがあるかないかという基本的な意識の変化について、図1に掲げた。

これまで、「一生結婚するつもりはない」と回答した独身者の割合は調査のたびごとに増え

て来てはいたのであるが、2015～21年の増加は、これまでの増加幅を大きく上回るものだった。

男性は12.0%から17.3%への増加、女性は8.0%から14.6%への増加となっており、特に女性の増加が著しかった。

また、「いずれ結婚するつもり」という回答の割合は、1982年から97年にかけて低下した後、97年から前回調査の2015年にかけての18年間は、男性は85%前後、女性は90%前後でほぼ横ばいであった。ところが、最新の2021年には男性が81.4%、女性が84.3%とこれまでになく大きく低下している。

こうした動きから、結婚観はこの40年間に次のような3段階で変化しつつあると考えられよう。

① 1982～1997年

結婚しなければならない

→ 結婚しなくてもよい

② 1997～2015年

結婚したいけれどできない、あるいはしない

③ 2015～2021年

結婚したい → 結婚する気がない

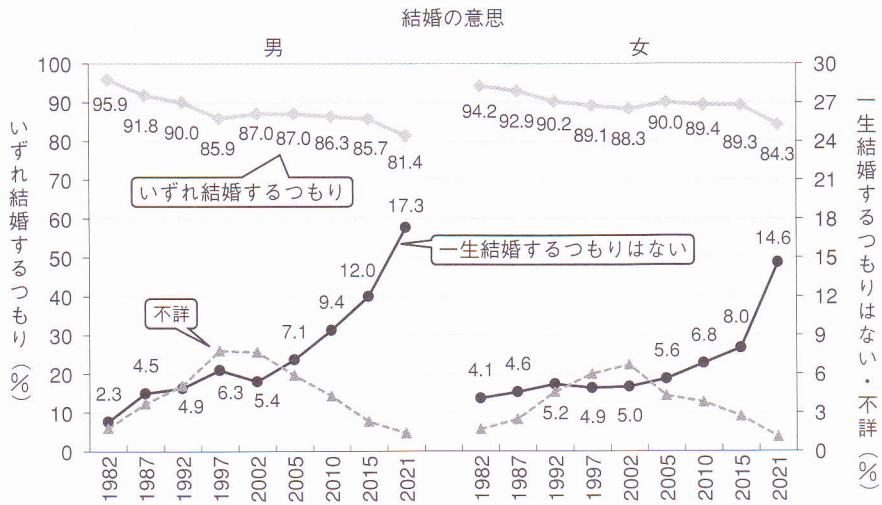


図1 結婚できないではなく、そもそも結婚する気のない独身男女の急増

注) 対象者は未婚者(18～34歳)。

資料) 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(独身者調査)」

このように、少し前までは、結婚したいけれどできない、あるいは結果としてしないという状況だったのが、今や、結婚したくないからしないというパターンがかなりの数を占めるようになったのである。

この点は、態度の決まらない「不詳」の割合が急減していることから裏づけられる。

また、同調査では「女性のライフコース」に関し、「実際そうなりそうだと考える」女性の予想について調べている(図2)。

2021年の結果として目立っているのは、「非婚就業」コース予想の増大である。2015年の21.0%から何と33.3%に急増し、「子育て後再就職」の22.7%と「結婚・子育てと仕事の両立」の28.2%のいずれをも上回るに至っている。すなわち、専業主婦志向からキャリアウーマン志向への転換の中で、最近では、仕事のためには非婚を厭わないという意識が大きく女性をとらえるようになったのである。

以上、我が国の皆婚習慣が崩れつつあること

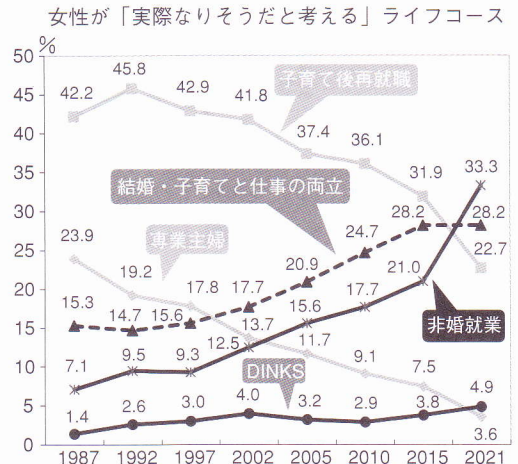


図2 女性が予想するライフコース

注) 専業主婦(結婚または出産の後は仕事をしない)、DINKS(結婚後子供を持たず仕事)。調査対象は独身者(未婚の女性18～34歳)。

資料) 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(独身者調査)」

が実態面だけでなく意識面からも明らかとなった点が注目に値すると言えよう。

イケメン・イクメン志向とともに、個性の尊重へと女性意識が大きく変化

さて、このような結婚観の転換の中で、男女が結婚相手に求めるものは、どのように変化してきているのであろうか。

図3には、独身男女が結婚相手の条件として何を重視しているかについて調べたほぼ5年おきの結果をグラフ化した。

【男女が重視する点の特徴】

時系列的な変化の特徴についてふれる前に、項目別の男女の意識について整理すると、次のようにまとめられよう。

- ・男女ともに「人柄」を重視する者の割合が最も多く、しかも、他の項目と異なり、単なる「考慮」は少なく、ほとんどが「重視」をしている。当たり前と思われるが、やはり結婚相手はひと次第というのが最強不変の観点な

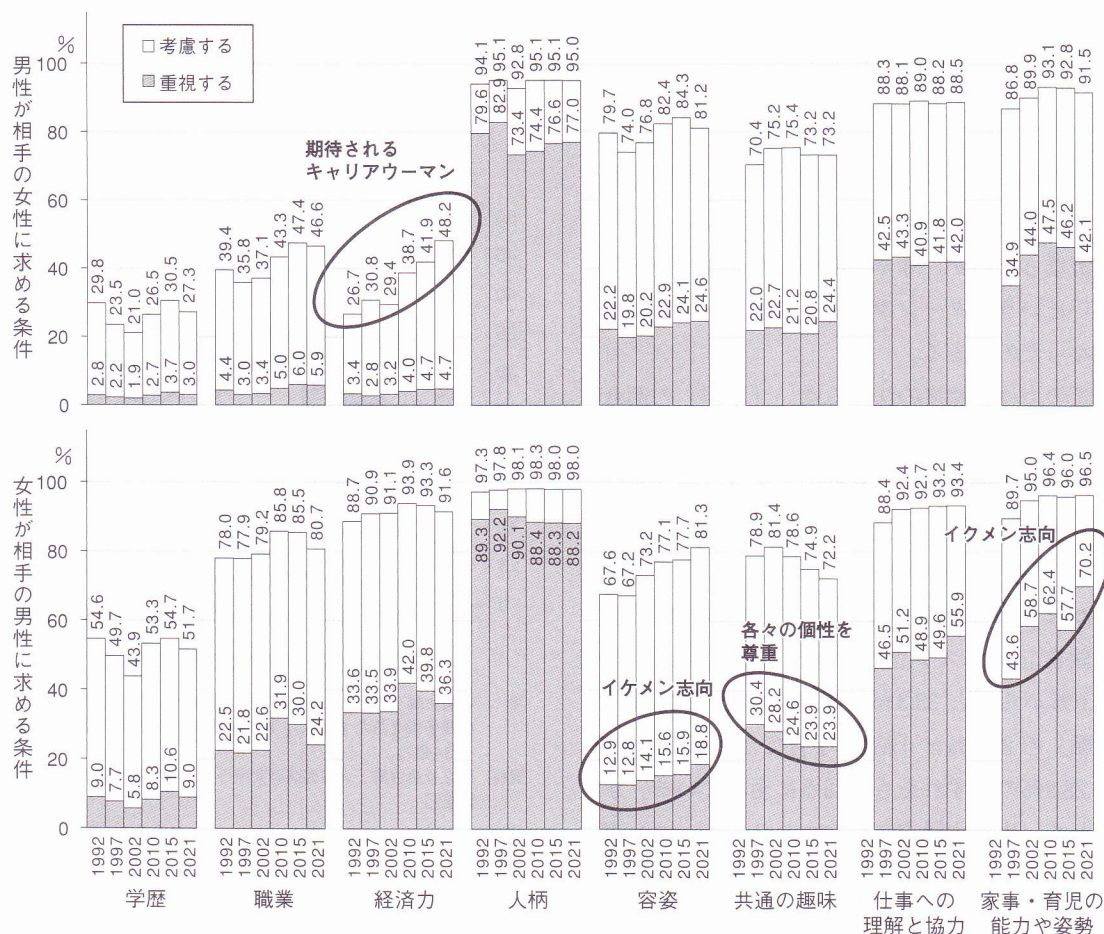


図3 結婚相手の条件として人柄、容姿、経済力、家事分担などの何を重視するか？

資料) 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(独身者調査)」

のである。

- ・男女差がはっきりしているのは、「学歴」、「職業」、「経済力」の3項目である。すなわち、この3項目では、男性より女性の方が結婚相手の条件として重要視している。特に「重視」の割合で男女差が著しい。
- ・「容姿」、「共通の趣味」、「仕事への理解と協力」、「家事・育児の能力や姿勢」の4項目は男女でそれほど大きな違いはない。
- ・ただし、「考慮」ではなく「重視」に着目すると、「容姿」は男性の方がやや重視が上回る傾向（美人志向）、「仕事への理解と協力」、「家事・育児の能力や姿勢」の2項目では女性の方がより重視する傾向が認められる。

【時系列的な変化の特徴】

こうした構造的な特徴を踏まえたうえで、次に時系列的な変化を見てみよう。これについては目立った点を図中に黒の太線の楕円とそれについての太字コメントで示した。

・期待されるキャリアウーマン

もともと女性は相手の「経済力」を重視しているが、男性も相手の「経済力」について考慮する割合が増加している。夫婦共働きが増え、男性も相手の稼ぎを無視できなくなっているのであろう。「職業」についても同様の変化が認められる。つまり、男性は家計の維持などから、相手にますますキャリアウーマンを期待するようになったのである。

・イケメン志向

男性の方が重視する程度が大きかった「容姿」について、最近では女性も相手に期待する割合が増加しており、「重視」と「考慮」の合計では2021年調査ではじめて女性の回答が男性を上回ったのが印象的である。男

女関係において最近では美人志向というより美男子（イケメン）志向が目立つようになっているのである。

・イクメン志向

イクメン（イケてるメンズ）にひっかけて、育児に積極的な男子をイクメン（育児するメンズ）と呼ぶようになった。女性が結婚相手の条件として「家事・育児の能力や姿勢」を重視する割合は以前より高かったが、最近ますますその程度が高まっている。なお、女性が相手に対して、家事・育児だけでなく「仕事への理解・協力」を重視する割合が上昇している点も見逃せない。夫婦関係における男女共同参画の意識は幅広く高まっていると言える。

・各々の個性を尊重

すべての項目の中で重視・考慮する割合が明確に低くなっているのは、女性の場合の「共通の趣味」の項目だけである。「共通の趣味」は男性より女性が重視する項目だった。女性は相手と仲良く共通の楽しみを享受する男女関係に大きな意味を見出していたのである。ところが、この項目を重視・考慮する割合は女性については低下を続け、男性のレベルを下回るに至っている。各々の個性、趣味を尊重し合う夫婦関係がよいとする自立尊重型の価値観に変化してきているのである。

・目立つ女性の価値観の転換

男性は「経済力」関連項目を除くとその他の項目の重視・考慮割合にあまり変化がないのに対して、女性については多くの項目で変化が見られる。女性の価値観の転換が最近の大きな特徴と言えよう。